

ノードフ・ロビンスの音楽療法

—— 子どもの持つ創造力を生かしながら ——

／ 実技を通しての教材紹介 ／



〔岡崎 香奈〕

福岡県出身

14歳の時、父親の転勤に伴い渡英。

現地高校を経て、英国王立音楽院ピアノ科卒業。

ノードフ・ロビンス音楽療法センター音楽療法士養成課程において英国音楽療法士 Dip. MT(NR)の資格を取得し、平成元年帰国。

平成2年第35回西日本新人演奏会最高賞受賞

現職 調布市総合福祉センター 音楽療法非常勤講師

福岡県可也病院 非常勤音楽療法士

ユニバーシティ・コンサルタント内

英国王立音楽院入試担当顧問

てくるといふことができよう。例えば、現在私は障害児と痴呆症の患者の音楽療法にあたっているが、この二つの種類の対象によっても、目的とすることに違いがある。

初めに障害児を例にとってみると、音楽療法の目的の中心は、その子供の発達を促すことにある。子供の発達というものは、外界からの刺激を受け、それを吸収し、自分で色々な表現の仕方を体得し育っていくものであるが、障害児の場合、障害を持っているためにその刺激の受け方が不充分であったり、表現の方法や手段が乏しかったりする場合がよくある。その時に一つの入りやすい刺激として、また表現手段として音楽を用い、発達を促すための音楽療法を行うのである。

また、痴呆症の患者の場合は、発達云々ではなく、今まで生きてきた長い年月の回想だったり、また痴呆症の問題行動や精神症状の軽減や安定が、音楽療法の目的になってくる。欧米ではさらに、今問題になっているエイズ患者の音楽療法や、ホスピスでの音楽、また刑務所や少年鑑別所での音楽療法など、さまざまな分野での研究が行われている。

／ 音楽療法とは

—— 音楽で何ができるのか？

この頃、音楽療法という言葉が、いろいろな場所ですられるようになった。音楽療法という職業が国で認められている欧米に比べ、まだ日本ではその位置を確立していないが、いろいろな職業の方々が、音や音楽の持つ不思議な力を利用して、何らかの治療に役立てようという動きが出てきていることは喜ばしいことと思われる。

音楽療法とはその名の通り、音や音楽を用いた療法(セラピー)である。ここで果たして、音楽で何ができるのか？と考えると、それは対象によってかなり変わっ

／ ノードフ・ロビンスの音楽療法

● ノードフ・ロビンス音楽療法の特徴

ノードフ・ロビンス音楽療法というのは、音楽療法の中のアプローチの一つで、その名前の由来はポール・ノードフ博士とクライブ・ロビンス博士からきている。音楽療法を始めるまでは、ノードフ博士はアメリカ人の作曲家かつピアニストで、ロビンス博士は特殊教育に携わっていた。二人は、1959年からパートナーとして、音楽療法の研究を始め1977年ノードフ博士亡き後も、ロビンス夫妻が国際的に活躍し、現在はイギリス、オーストラ

リア、ドイツ、アメリカ等にクリニックやセンターが設立されている

この音楽療法アプローチは主に子供（障害児）中心に行われており、形態は個人療法とグループ療法があり、セラピストは2人でペアになって（1人がピアノを弾き、1人が子供と関わる）治療にあたる。

このアプローチには大きな特徴があり、それは主に「即興演奏」が中心になっているということである。これは、人間一人一人持っているテンポやリズム、声の高低などそれぞれ違うので、既成の音楽を使うより、セラピストがそこにいる瞬間の子供の音楽をその場で作りだし、それを音楽療法の中でのコミュニケーションの手段として活用しようというものである。

例えば、「アア」としか声が出せない子供と関わっていく時に、そのピッチを抑揚とリズムを同じような音で返し、それを聞いてまたその子供が反応し、またそれを音で返していく、というようなプロセスを行う。どこか母親と赤ちゃんとの対話に似たものであるが、それを繰り返していくと、セラピストとその子供とのコミュニケーションがだんだん生まれて、子供の表現力が増えてくる。このように、何か刺激を受けたものから、子供が反応し、それを受け止めてくれる大人とのやりとりを通して、社会性などを養うことができるのである。

●音や音楽の持つ特性と、その心理的影響について

音楽の持つ要素を、人間の身体や行動と重ねて考えると、たくさん共通しているものがある。例えば〔テンポ〕一人の歩く速さなど、〔リズム〕—はたきをかけるリズムなど、〔メロディー〕—声の高低、抑揚、〔強弱〕—声や力の強弱、〔ハーモニー〕など、様々なものがある。これらの特性と、心理的影響をあげてみると、いろいろな例がある。メロディーの中でも、増2度や増4度などを用いたものはインパクトがあり、ほっとしている子供に気付きを与えることができる。また、雰囲気盛り上げようと思ったら、音楽のテンポを少しづつ加速していったり、反対に安定させるために、テンポをゆっくりもっていったり。こだわりのある子供に、終始和音のない五音階や全音階の「わく」のない演奏をあたえたりなど、音の持つ心理的影響を意識して、セラピストが音楽療法の中でその特性を活用するのである。

●ノードフ・ロビンス音楽療法の教材(楽譜)

前記したような音楽の特性を生かし、子供の音楽療法に使えるように、ロビンス博士が作詩し、ノードフ博士が作曲した曲集がでている。

MMB MUSIC, INC カタログ参照

P. O. Box 32410, 10370 Page Industrial

Boulevard Saint Louis, Missouri 63132 USA

最後に、私がノードフ・ロビンス音楽療法センター実習時代に、ロビンス博士から教えられた二つのことばを紹介したい。

「楽しいことは子供にとって栄養である」——これは、その意味の通りで、大人が強制することなく子供が自分の中から「おもしろそう」「やってみよう」と思い、それを実行できる機会を大人がどれだけ与えられるかで、子供の成長が変わってくるということ。

「音楽は失敗であってはならない。すべて成功でなくてはいけない」——障害を持つ子供は障害があるから何ができないと言われてがちだが、障害があってもできることは沢山あるというふうにと考えるとその子の可能性がどんどん見えてくる。その可能性を引きだし、子供に自信や達成感を経験させ、それを発達につなげていくことが大切だということ。

そして、何よりもその子供たちを受け止める、大人の存在や役割というものがいつも大人によって見直されなければいけないものであるのではないかと、思うのである。

<訂正表>

167・168号にいくつか誤りがございました。

関係の方々に深くお詫びし、ここに訂正致します。

167号 P.63 東日本栃木地区

- B級 1位☆前原小百合(小3)
2位☆斉藤 志保(小4)
3位☆綱川 千帆(小3)

168号 P.85 八千代地区PTNAヤングピアニストコンサート
浦和市文化会館小ホール→浦安市文化会館小
ホール

P.61 ピアノ演奏検定小金井地区
2月27日(日)→2月27日(土)